



説教要旨「向こう岸へ渡ろう」

マルコによる福音書 4章 35～41節

イエス様は、弟子たちに「向こう岸へ渡ろう」と言って舟に乗り込みました。イエス様が言う「向こう岸」というのは、異邦人の土地であって、イエス様のことを知っている人などいない、まさにアウェイの土地です。それに比べて今いるのはホームタウン・カファルナウム。そこでは、イエス様自らが出かけていかななくても、人々の方からイエス様を求めてやってくるのです。けれどもイエス様は、その居心地の良いホームタウンから出かけて行って、誰も知る人がいない異邦人の土地へと出て行きました。さらに言えば、そこでは人々に受け入れられず、出て行って欲しいと言われて、すぐに帰ってくることになります。

「向こう岸へ渡る」ということ。つまり、新しい場所へ出かけて活動すること。あるいは、新しいことを始めることには必ず失敗するリスクが伴います。けれどもイエス様は、そこで失敗することなどお構いなしに向こう岸へと渡って行かれるのです。そもそもイエス様にとって、この地上こそがアウェイです。イエス様はホームである居心地の良い神様のところから、“向こう岸”つまり敵ばかりのアウェイであるこの地上へとやってこられ、孤独に十字架へと歩まれました。十字架につけられて処刑されることは、人間の価値観では敗北です。けれどもその十字架の死によってイエス様はわたしたちの救いを成し遂げ、十字架の死を勝利の出来事としたのです。

イエス様が指し示す“向こう岸”は、遙かに遠くて、とても見通せません。そこへ向かう途中にも困難があるだろうし、たどり着いたと思っても、追い返されてしまうこともあるでしょう。けれども神様は、わたしたちが経験する失敗や挫折をも豊かに用いて御業を成し遂げ、失敗を失敗のまま終わらせず、挫折を挫折のままで終わらせはしないのです。そうして成し遂げられる神の国、神様の支配する世界は、力で相手を虐げて思い通りに従わせるような世界ではなく、相容れない所があったとしてもお互いがお互いを尊重し合い、手を取り合って進んでいく世界であるはずなのです。

(2022・2・27 説教者：稲垣真実)